

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

内村鑑三先生書目問

一九〇七年  
明治四十年

謹賀新年

明治四十年の標語として使徒パウロの左の言を  
進呈仕度候

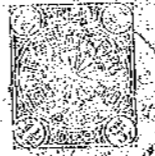
警誠せよ、信仰に於て固く立てよ、雄々し  
かれ剛毅なれ、愛を以て汝等のすべての  
事を爲すべし。哥林多前書十六章十三、十四節

明治四十年二月一日

東京府下豊多摩郡淀橋町  
角筈百一番地

内村鑑三

大分県便郵



陸中 花巻川口町

齊藤 富三郎様  
花巻 教友会  
七甲

大分県便郵

大分県便郵

拜啓。先日は清見無事  
被下有難く奉存なり。

今年は昨年よりは至て

軽症に清座に召す余

事清安心と下たり。

おツサ子も昨日より微恙

にて杖床致しり、大も執も  
おく、目<sup>ミ</sup>と申す所は見るり  
不申、多分二三日にて全癒  
の事とあり。

彼女も当家に来り、とす  
既に三ヶ月に相成り、え共、  
何やら懐<sup>サレ</sup>き不申、それには孤人

ど閑口はり、他の教支会員と  
の交際も少く、無之、亦之を  
求の人も欲し申さず、只、孤独  
を守り居り、様子に清きか、  
唯胸に物、何が悲し痛と  
甚<sup>シ</sup>く居るやうに見え、受けしえ  
其、とちまにも家内にも打聞

け不申。是には死んじ同々致し

か。小生の考ふるに此様子にては

永とは奉公<sup>は</sup>思見来あきつと

く存あり。目下の處にては彼女の

思ふが儘に致し置る。或りは

帰國と存するに非ざらん

有る。差し斯かる希望にこそ

懐き居りかは。今日の處にては

其意に従ふより他に途無二と

り。小生等の豫想致しか。過り

彼女の體所欠より。又気所欠

生之月より考つて。下女奉公は

彼女に取リ甚した無理と存る。

故に小生等は決して彼女と

妻の不申。唯甚したる言の

有る。若し貴兄に於て此際  
何が清意を見有之れば、清  
申越ふたぐ形も早々

一月廿三日

内村鑑三

斎藤宗三印見

一月廿三日

和書研究

内村鑑三

陸中花巻川口町

齋藤宗三郎様



観展

拜啓

ツ子美近頃の様子

一變し漸く家の者とし

く相成らるる所から

下たり。彼女もよく著の

如く金くまの事教と性



質とと誤解し居り、嚴  
格あると云ふ神の道と解  
し居り、為の<sup>ニ</sup>矢般の不  
愉快と自こして、豪族の  
者<sup>共</sup>に招きしちこ<sup>ト</sup>存<sup>ス</sup>。

日本人が、瑞音の<sup>ニ</sup>與<sup>テ</sup>、  
と世<sup>ノ</sup>災<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>困<sup>ニ</sup>難<sup>ニ</sup>、<sup>又</sup>彼<sup>ノ</sup>の

場合を以しし<sup>ト</sup>も、能く<sup>ハ</sup>公  
る<sup>ル</sup>こと<sup>ト</sup>存<sup>ス</sup>。

小生は強人と奉後、但し

老人は大に弱りたる<sup>ニ</sup>、<sup>又</sup>ナ

心<sup>ノ</sup>配<sup>テ</sup>、<sup>又</sup>居<sup>ル</sup>。

博覧会開設に相成り

此は、教友館宿泊方  
々清上系清待申方、早々

二月十二日

鑑三

齋藤君

二月十二日

内村鑑三



陸中、花巻川口町  
齋藤三郎様



其後是非次第清一  
沙汰仕り。

ウサ子其後一妻又仕り、  
今は家内の者と同然に  
相成り、与清の安心を  
たむり、且清の序の事其

旨彼女の母の法傳へ  
と下たし何れにしろ彼女  
が非常の人物あるは  
一月に於て認の申り。

教支館へ清宿泊方々  
博覧会開会中は非  
一度清上を要と望まら。

教支会前途の方針  
幸に就てユツリと清相  
詮教したくありんか。小生も  
近頃は新しき文明に  
接し感謝致し居らり。  
老書生山岸全五又

々帰社致し少立と様サ  
と共々こころこころあう、好都合  
に決り奉る、彼れ今年教友  
會館の主任たり、彼の差を  
細君と会友の来泊と  
待ちこころあり、  
右申上たぐ草す

三月五日

鑑三

宗二郎兄

10.  
1107号  
三ノ五ノ

陸中、花巻川口町

齋藤宗二郎様

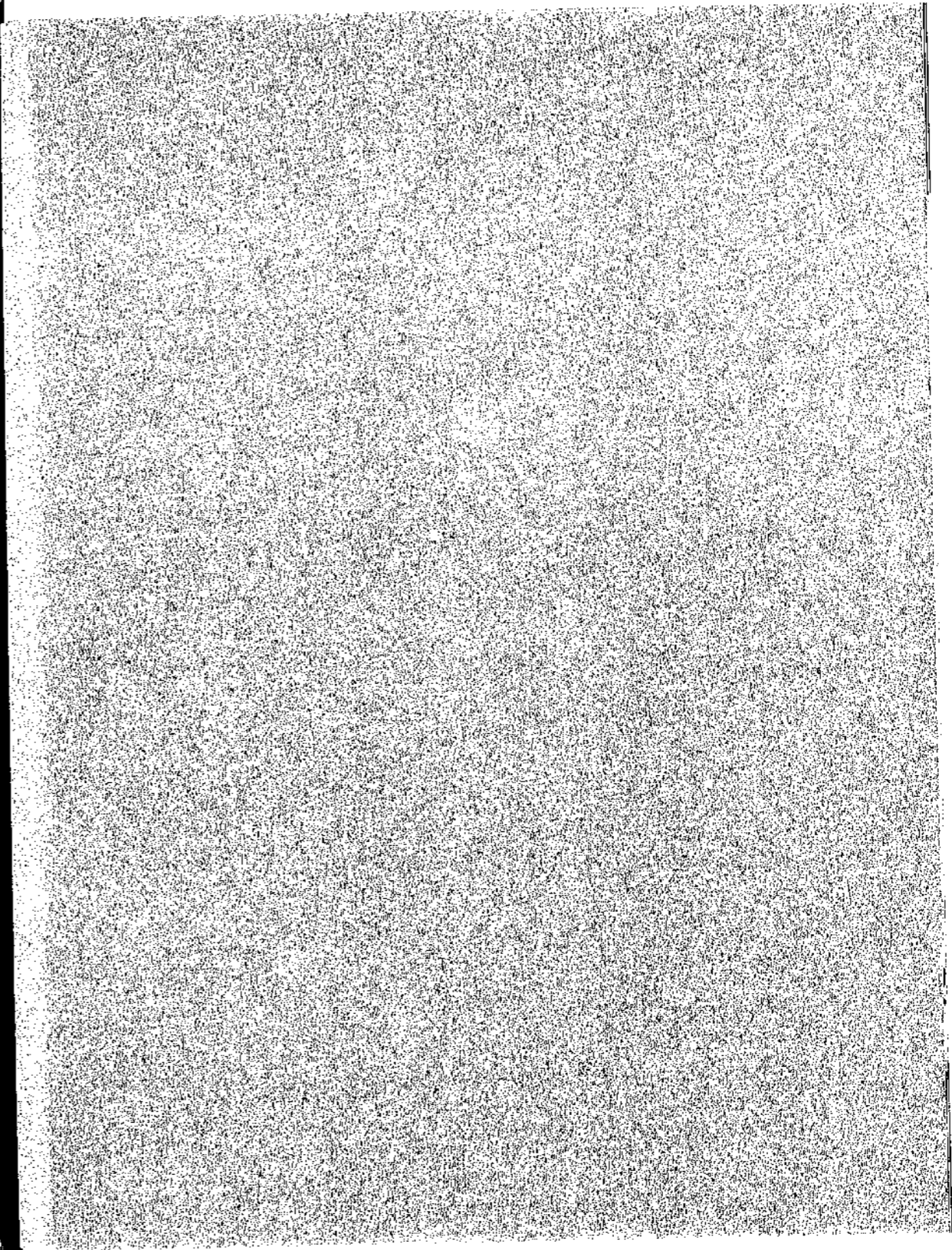


3-5



内村鑑三

東京府  
字角  
聖書  
新法



拜啓、陳は這般老父永眠に  
就ては厚き御同情に快かり、  
且つ御深切に御花料まで  
御送り被下御厚意幾重  
にも有難く奉存候神の  
御恵みに由り先つ萬端無

事に相濟まし復たび主の御  
事業に就くを得るに至り候間  
尔憚御放心被下度候、右御見  
舞御禮までに申上はく、早々  
敬具

明治四十年四月三日

内村鑑三

齊藤宗次郎様

花巻教友會  
御中



緘

内村鑑三

東京大学文学部  
国文学研究科  
国文学研究社

陸 中國花巻川口町

齊藤宗次郎様



貴州

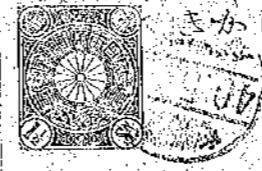


拜啓陳、先般不幸の際、深き御同  
情を尙表し、被下感謝の至り、奉  
存候、依て聊か御礼を表すため  
別便を以て紀念写真五葉御送附  
申上候間、御後手被下度願上候、

五月

内村鑑三

此は御返書に於て、五月五日、  
御返書に於て、五月五日、  
御返書に於て、五月五日、



郵便加付

陸軍大臣 陸軍省  
齊藤宗次郎 様



印刷局製

行

轉所、清家内は清成  
人多き由深く清成情を  
寄せ申り、頼正某事  
由りて申す家は恩惠の増えん  
事と新り上り、  
留方大暴れ、後某事大  
分、後自申り、生涯の後三

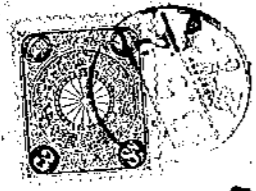
分の一は手康活動、生涯  
あらんことを望まじり、

明日より一寸大段まご考り、  
故年井中永眠一周年に際  
し遺族を慰めるために訪  
る、 44々

六月二日

鑑三

齋菜只



陸中、花巻川口町

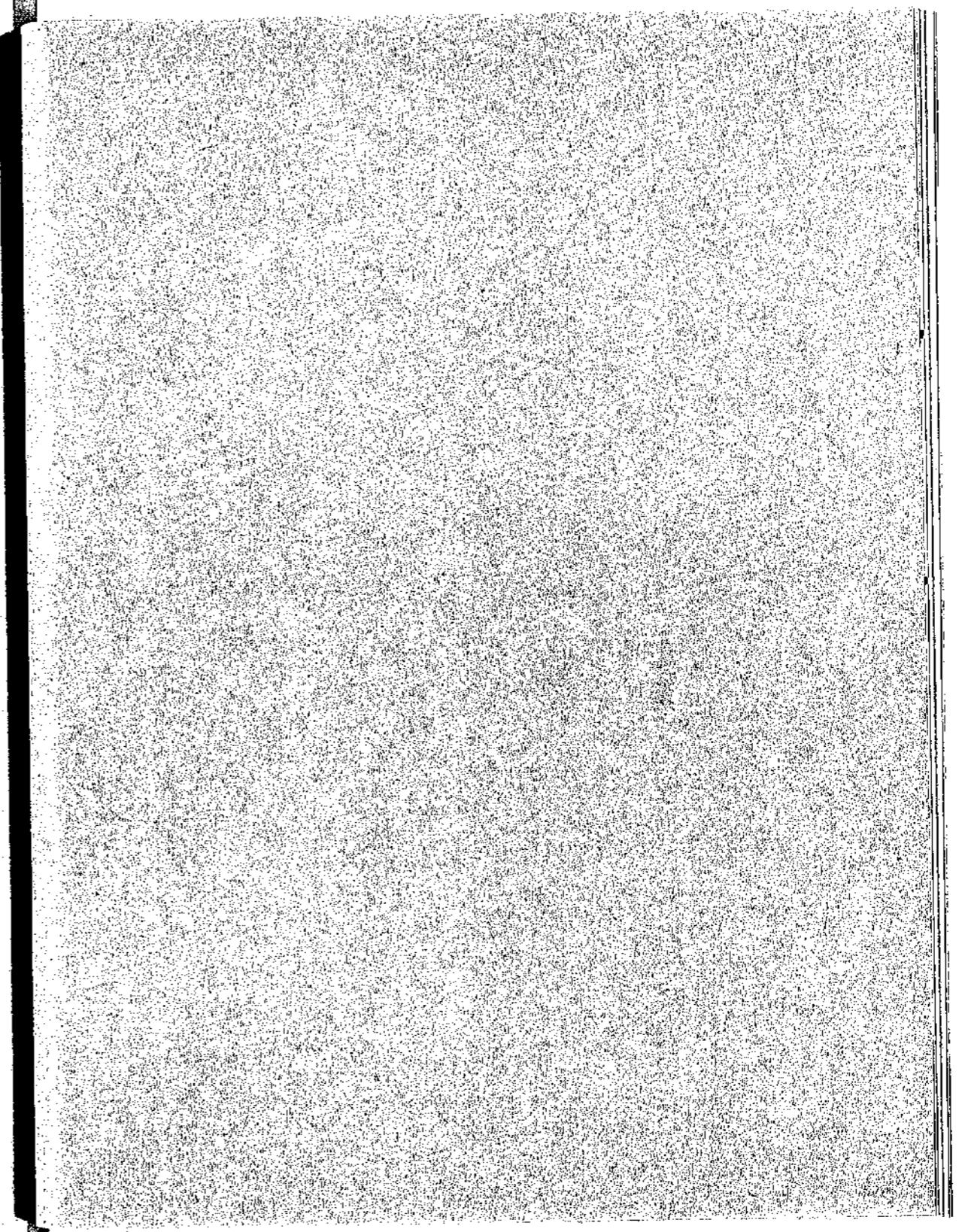
齋藤宗二郎様

清見舞

6-2

内村鑑三

東京府立総合資料館  
〒100-8305  
東京都千代田区千代田  
総合資料館  
研究部









何れは情にほろろ因りて

皆人そは行きては心平

かたは心平の中は折角

に物と心平のおもひよき哉と書きて

勝利を得ぬ事と新りし

若し心平出ると縁と成ぬ事

こそ事得り障りには心平致さる

心平は道一し心平は道一

心

心平は心平の心平は心平

心平は心平の心平は心平

心平は心平の心平は心平

心平は心平の心平は心平

心平は心平の心平は心平

心平は心平の心平は心平

こゝに盡す所ありけり。——こゝに盡す所ありけり。

丁亥三月、静岡地方へ來り、宿守

史、阿良志、古印、傳、ね、あきらむる

交相、居り、上、書、上、略、ら、以、阿、尾、

如、

了、子、の、ま、あ、り、北健、こゝに、佛、

居、り、年、何、年、と、あ、ら、ふ、と、云、ふ、日、

の、ま、あ、ら、ふ、日、何、日、何、日、

先、に、知、る、事、は、な、し、く、な、り、た、り、

是、の、物、を、な、す、は、な、し、く、な、り、

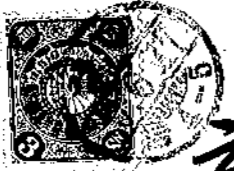
ま、あ、ら、ふ、日、何、日、何、日、

あ、ら、ふ、日、

丁亥三月

宿守

奇跡字之印様



陸平花卷町川崎  
斎藤宗二郎様



10015

内村三郎

東京府豊多摩郡野田町  
字南台百〇番地  
聖書研究社

10015

由緒傳々先候中より  
大世子病院の件左の如く  
申奉りし旨付同封にて送  
り申上り候事には之より  
よろしくお終の上は決定  
の程なり候人ながら是と

中... 以... 情...

... 以同情...

... 牙...

...

...

...

角... 標...

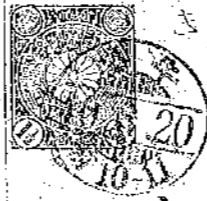
此外... 術... 料... 要...

お世先日御座し、件同じ合せ申。一應修室の上は、  
ごは入院許可相成り、如何決定せし。官費<sup>46</sup>も入  
院出来し、如何も診察の上にて定まり、入院費  
は自費より一日一孝三回、二孝二回、三孝一回亦  
任り由り、病気の経過如何、入院の時日に長  
程と生ず、く候、日数は様例新、難く、尤も  
程、は半月長くも一月位と候、但し入院  
費以外の色と報費も入ること、候、  
一紙上



陸中名花巻町川口町  
 斎藤宗治郎様  
 要用

ノリキリ  
 斎藤宗  
 内村孝子



さかほ便郵

市外新宿南管百一

内村 静子様

表目は関巻町三三

大井方 味上管迄

六日午後



送製局刷印

送製局刷印

清無事清場 仰の由大慶に下りた  
清東上中は失礼のみ仕り、小生等は  
今年に幸いに今日まで骨肉の叛逆  
はし又け不申し且共、眼疾に犯るは頗る  
困難致し、夏期諸診令後には必ず  
何かが甚し事出来致し甚だニウ回響の感



後、其、奉年の金金は少く考へ物に法  
度、一勿違ひ生一人に取らせ

叔ツサ子の事、執事清申越しに相成り  
彼女に取らせは甚だ気の毒、奉年より併し  
先般申上り次第に、當方に於ては彼女を  
令嬢とし受くる事は得られぬ、彼女の氣  
質、し家柄とも考へて下す、使ふ事は

甚だ心苦しく法を、執事、矢張り先般  
清相談致し、通り、取極めなく奉年より、三  
日前、彼女の書面、由れば彼女の母が彼  
女と當方に、遣し置きたは主として善き  
婿を見出し世が人の由り有之、然れども  
是れ世事に疎き生世の沖、爲し難き所  
に有之、彼女を生に居し、是れ誠實に

の六つに縁とする所に清きるを五、の六に  
上彼女の身上に就て直接に行はるべき事  
と爲し得べしといふ生の能い事なる所の清き  
左不為清言言平被下たし單つに記す  
曰

八月廿一日

品岡藤兄

鑑三

清兄妹の直しと清傳のしとたか

東京府豊多摩郡大井町  
宇野野町  
聖書研究所

8-21

内村鑑三

陸中、花巻川口町

品岡藤宗二郎様



責酬

拜啓御書に接し感謝は  
色々の御心配深く御推察  
申上候之に深遠の意味の  
存すに今更ら申上ぐるの  
必要なき事と存候貴兄の  
今月中御出京ふきは大  
了失理に御座候

先便申上候通り小生も  
今夏は非常にマイリト  
併し秋冷の到来と同時に  
稍々元氣づき候間御安  
心と下度候小生の心ある  
事業の為めを思ひ夏期  
講演は今年限り度止

致さぬは相成らぬ事と存  
候御地教友諸氏に対し  
殊に濟まざる儀に候得  
共事實御推量の上御  
ゆるしと下度今より願置  
候何れ何か他の方法を  
次て御償ひ可申候  
つさ子荷物の儀奉細申

知致候天氣晴れ次第  
山岸に命じ駕車便に  
托し差送可仕候  
御地諸兄弟宜敷御傳へ  
と下度候

仲々頓首

九月十八日

内村鑑三

齊藤宗次郎様



陸中花巻川口町  
齋藤宗次郎様

賞酬



内村鑑三

東京府立文庫蔵  
字號行司。虎巻地  
聖書研究社

40  
二

拜啓先般御上京の節  
甚だ失礼仕小其後萬  
事御好都合の事と奉  
存小  
別當の如きもの舞ひ込  
み申小彼も当今は少

しは眼を覺ませしもの  
様に思はれり或は再び  
吾等の友とあるやも知れ  
不申 御美考らば申  
上らぬし

九月三十日

内村鑑三

齋藤宗次郎様



一奉鏡の侍思、今は剛えんて其の途と

ちん

宣教師と經濟上の關係と謝絶せしむ

まゝに合ふ補脚を乞ふに可からず。中極の由作  
と其のゆげと信する外何れともあらざるを其身  
は職事と求めざるなり。即ち信條、信條に流  
れざる車馬の地位と、さへも、各處に事々あるが、体  
面を以てするなり程直きものなり。而して中極は之  
を以てする。然りて之を自由にするは、(去る) 信條に  
まゝにその必要を見せしむ(去る) 信條に、(去る) 信條に、  
合はざるにその必要を見せしむ(去る) 信條に、  
合はざるにその必要を見せしむ(去る) 信條に、



陸中、花巻、川口町  
齊藤宗次郎様



内村鑑三

東京府立第一高等学校  
文学部  
聖書研究社



東京豊多摩郡淀橋町  
角筈三三聖書研習会  
内村鑑三様

室角

読者の人



進製局刷印

拜啓。陳止の生年  
仙台赤る妹の婿重病  
の由に付き明朝此地  
を参り、彼地に参り  
申すべく。就ては神差  
し許し給はる序を以て

清地を清見無舞り  
申すべし相成るべし  
来る十三日の日曜日に  
清地に於て送りたく有り  
巻細は仙生より申す  
り、尤も病人の様子に  
て考の上申来ぬかも知  
り、其節は清空しとた  
く、但し考上の申来る  
やう清祈りしとた、仙  
生との宿所は左の通り

仙台市北七番丁  
木村康託方



陸中、花巻川口町

品川藤宗二郎様

要

10-9 東京市外角等101  
内村鑑三

十月九日夜

品川藤宗

鑑三



電報送達紙

局著 受償 事務者	局 受償 事務者	第 一 七 號	發 行 局 報 定 撥	名氏所居人信受	
				ハナキ カワキ サトウ ヨシキ	
大正三 大 ソ ノ 四 號				名氏所居人信受	
事記				ヨシキ	

注  
他人宛たる電報の配達を受けたる者は其由を付箋に直ちに之を配達したる電信局所に返戻すべし決して其受取人へ直接又は手渡ししてはならぬ



拜啓陳者今般冬上の  
節、非常の御優遇に  
堪り、存人と家にあるが如  
き感懐きは礼の申さ  
様も無之次第には、直

Table with multiple columns and rows, containing faint text and numbers, likely a ledger or account book.

此地の様子季細に相分り  
之よりは深きは同情を  
以て靈の交際を續け  
る事を得るを存し

感謝致候

少生此地を去りしより仙台  
まで泊宇都はるまで二日旅

日は家内に大変迄の出  
迎を受け午後五時無事  
帰宅致候此地の様子  
特に相談しちから帰宅  
致候諸兄弟、軍敷は  
傳ヒ、度候此段不取  
敢は礼迄に申候



草

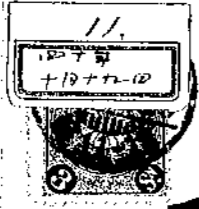
十月十九日

鑑三

齊藤兄  
つた子様

内村鑑三

陸中川口花巻  
齊藤宗次郎様



拜啓、由乃影正に落  
堂手、一同喜人ご拜見

仕り、

小生方移轉早々祐之

事敷似脇千フスに四雁り、

今に下執仕り、一同ハ

所致し居り、由乃兄に於て

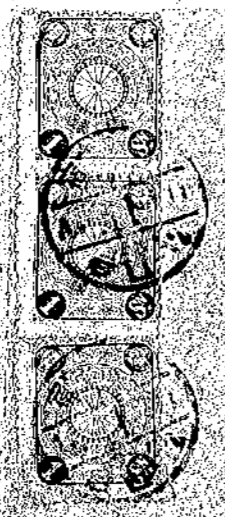
一生を以て彼のために待た  
清新に心をばし一生に取  
幸福の上におく。一生は今  
四神が其徳子とせし中  
給ふはとせと愛し給ひ  
この聖法も能く味ひ  
申す  
左様用まて早々

十月十日夜

鑑三

○岡為見

陸中巻川町  
廿一系宗二郎様



内村鑑三

大正九年九月  
胆野書局所究

東莞市外相木

内村鑑三

陸中花巻川口町

品川藤宗次郎様



拜啓陳、先般来、小兒  
病氣付き、不相變、御地緒  
兄弟の篤き御同情に、其  
かり、何時もあから御同情  
幾重にも有難奉存候  
御蔭を以て、漸く昨朝解  
熱致し、先づ危険、免れ、

間々憚御安心被下たく  
候危険に遭遇するたび  
毎に諸兄姉の御愛心を  
味ふを得感謝の至りに  
不堪し

右不取敢御礼まで  
申上候草々

十月二十四日

内村鑑三

齊藤宗二郎様

花巻教友會  
御中





陸中花巻川口町  
齊藤宗二郎様

貴酬

11-24

東京府豊多摩郡滝橋町  
大字柏木九百拾九番地  
内村鑑三

特許。前田女史の事と。故きを  
に申す。

彼女が執<sup>一</sup>成<sup>二</sup>する「研究」を

美我の人とする疑<sup>一</sup>ふまきと云ふが、

今回の方の児を癒せしは彼女の

美学的行儀に由り申す。

彼女が非常に口厭れあるは疑  
なき所に清き事。是れは正しく彼女の  
今日までの境涯の然らしのし所  
二は彼女の口厭れ正しく主観の  
然らしたる所となる。

彼女が良子に甚かくて希聖  
を嘆息し居るは事之を以て世に  
小生は自ら其の口厭れを以て

他ニ人々の口厭れも亦其の如し  
し難しと云ふは人々たる事。

口厭れの口厭れ

十一月

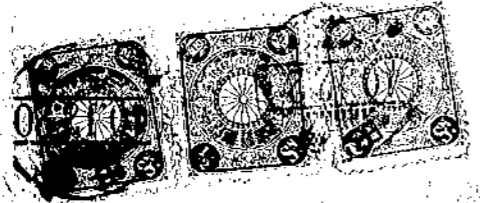
鑑

の口厭れ

12-20.

陸中、花巻川口町  
齋藤宗二郎様

受書



東京府豊多摩郡滝橋町  
大字柏木九百拾九番地  
内村鑑三

